

氏名	角田 伊知郎
授与した学位	博士
専攻分野の名称	歯学
学位授与番号	博甲第7034号
学位授与の日付	令和6年3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文の題目	The Impact of Oral Health Behaviors, Health Belief Model, and Absolute Risk Aversion on the Willingness of Japanese University Students to Undergo Regular Dental Check-Ups: A Cross-Sectional Study (口腔保健行動、健康信念モデル、および絶対的リスク回避度が日本の大学生の定期的な歯科健診受診の意志に及ぼす影響について：横断研究)
論文審査委員	柳 文修 教授 江草 正彦 教授 大原 直子 准教授

学位論文内容の要旨

【緒言】

定期的な歯科健診の受診を含む口腔保健行動は歯科疾患の予防に重要である。高校生までは学校保健法に基づく年1回の歯科健診は義務である。一方、大学生の定期的な歯科健診は個人の意志次第となる。したがって、大学生に定期的な歯科健診の受診を奨励することは非常に重要である。

口腔保健行動に影響を与えるものとして、健康信念モデルが挙げられる。健康信念モデルとは罹患性の認知、有益性の認知、重大性の認知、および障害性の認知の4つからなり、個人の認知や信念に焦点をあて、健康行動を説明するものである。健康信念モデルは口腔保健行動の促進に影響を及ぼすことが報告されている。しかし、定期的な歯科健診の受診意志と健康信念モデルとの関連は不明である。

リスク回避の定義は「将来への不確実性に起因するリスクを回避しようとする経済学における概念」であり、リスク回避は絶対的リスク回避度という尺度で評価を行うことができる。医学の分野ではリスク回避的な人は不健康になるリスク行動を避けて健康的な行動をとることが知られている。実際に乳癌検診においてリスク回避的な人は、乳癌罹患のリスクを回避するために検診を受診する。しかし、リスク回避と定期的な歯科健診の受診意志との関連は不明である。

本研究では口腔保健行動、健康信念モデル、リスク回避が定期的な歯科健診の受診意志に影響を与えるのではないかという仮説を立て、大学生における口腔保健行動、健康信念モデルおよび絶対的リスク回避度と定期的な歯科健診の受診意志との関連を横断的に調査することを目的とした。

【方法】

2020年4月の岡山大学歯科健診受診者のうち、研究同意が得られた学生を対象に、自己記入式質問票調査および口腔内診査を行なった。除外基準は、研究参加に同意しなかった者および質問票の提出が不完全だった者とした。

自己記入式質問票を用いて性別、年齢、口腔健康状態の自己評価（自己口腔健康観）、全身健康状態の自己評価（自己全身健康観）、口腔保健行動、健康信念モデル（罹患性の認知、有益性の認知、重大性の認知、および障害性の認知）、絶対的リスク回避度、および定期的な歯科健診の受診意志を調査した。口腔内診査では、う蝕経験歯数、口腔清掃度として Oral Hygiene Index-Simplified (OHI-S)、およびプロービング時出血を調べ

た。定期的な歯科健診の受診意志と質問票の各項目および口腔内診査の各項目との関連を Mann-Whitney の U 検定、カイ二乗検定を用いて調べた。そして、従属変数を定期的な歯科健診の受診意志の有無、独立変数を Mann-Whitney の U 検定およびカイ二乗検定で $p < 0.2$ となった項目とし、ロジスティック回帰分析を行った。有意水準は 5% に設定した。

【結果】

分析対象者は 748 名であった。そのうち 285 名 (38%) が定期的な歯科健診の受診意志を示した。Mann-Whitney の U 検定およびカイ二乗検定で $p < 0.20$ となった項目は性別、自己口腔健康観、自己全身健康観、口腔保健行動の項目 (歯間清掃具の使用、過去 1 年以内の歯科受診、定期的な間食と甘味料の摂取、1 日の歯磨きの頻度)、健康信念モデルの項目 (罹患の認知、有益性の利益、重大性の認知、および障害の認知)、および OHI-S であった。絶対的リスク回避度は有意な関連がなかった ($p = 0.253$)。

ロジスティック回帰分析の結果、定期的な歯科健診の受診意志は、歯間清掃具の使用 (オッズ比 1.616; 95% 信頼区間 1.104-2.365; $p = 0.014$)、および健康信念モデルの有益性の認知 (オッズ比 1.683; 95% 信頼区間 1.254-2.260; $p < 0.001$) と有意な関連があった。

【考察】

歯間清掃具の使用と定期的な歯科健診の受診意志との間に有意な関連があった。過去の研究では、歯間清掃具を使用する者は自己効力感が高く、自己効力感が高い者は口腔保健行動が良いことを報告した。したがって、歯間清掃具を使用する者は自己効力感を介して定期的な歯科健診の受診意志があった可能性がある。

健康信念モデルの項目である有益性の認知は、定期的な歯科健診の受診意志との間に有意な関連があった。過去の研究では、大腸癌健診の有益性を認知して、大腸癌健診を受診することが明らかにされている。本研究においても、歯科健診の受診の有益性を認知して、定期的な歯科健診の受診意志があった可能性がある。

絶対的リスク回避度は、定期的な歯科健診の受診意志と有意な関連がなかった。若者はリスク回避行動をとることが少なく、年齢が上がるにつれてリスク回避行動をとりやすい。今回の対象者は若者に限定されていたため、リスク回避行動をとらない者が多かったので、関連がみられなかった可能性がある。

本研究の限界は、対象者が岡山大学の学生のみで、研究結果の一般化が制限される点である。また、横断的研究であり、因果関係を明らかにすることはできない点である。

【結論】

大学生における口腔保健行動、健康信念モデルは定期的な歯科健診の受診意志と関連はみられたが、絶対的リスク回避度との関連はみられなかった。

論文審査結果の要旨

【緒言】

定期的な歯科健診の受診を含む口腔保健行動は歯科疾患の予防に重要であり、歯科検診を義務としない大学生に定期的な歯科健診の受診を勧めることは重要である。健康行動に関連のあるものとして口腔保健行動、健康信念モデル、リスク回避があげられる。しかし、これらの項目と定期的な歯科健診の受診意志との関連は不明である。よって、本研究では日本の大学生における口腔保健行動、健康信念モデルおよび絶対的リスク回避度の各項目と定期的な歯科健診の受診意志との関連を横断的に調査することを目的とした。

【方法】

2020年4月の岡山大学歯科健診受診者を対象に自己記入式質問票調査および口腔内診査を行った。

定期的な歯科健診の受診意志と質問票の各項目および口腔内診査の各項目との関連をMann-WhitneyのU検定、カイ二乗検定を用いて調べた。従属変数を定期的な歯科健診の受診意志の有無、独立変数をMann-WhitneyのU検定およびカイ二乗検定で $p < 0.2$ となった項目とし、ロジスティック回帰分析を行った。有意水準は5%に設定した。

【結果】

分析対象者は748名であった。Mann-WhitneyのU検定およびカイ二乗検定で $p < 0.20$ となった項目は口腔保健行動の各項目、健康信念モデルの各項目、口腔内診査の一部の項目であった。絶対的リスク回避度は有意な関連がなかった。

ロジスティック回帰分析の結果、定期的な歯科健診の受診意志は口腔保健行動、および健康信念モデルと有意な関連があった。

【考察】

口腔保健行動と定期的な歯科健診の受診意志との直接的な関連はみられなかったが、自己効力感を介して、また、健康信念モデルは歯科健診受診による有益性を認知して、定期的な歯科健診の受診意志と関連した可能性がある。

絶対的リスク回避度は、定期的な歯科健診の受診意志と有意な関連がなかった。今回の対象者はリスク回避行動をとることが少ないとされる若年層であったため、関連がみられなかった可能性がある。

本研究では口腔保健行動と健康信念モデルが定期的な歯科健診の受診意志に関わるという新しい知見を得た。得られた成果は新規性に富んでおり、今後、導入が検討されている国民皆歯科健診や定期的な歯科健診の受診を促す行動変容アプローチを考えるうえで有用である。本論文はすでにInternational Journal of Environmental Research and Public Healthに受理されており、国際的にも評価されている。

よって、審査委員会は本論文に博士（歯学）の学位論文としての価値を認める。